

Topics

インターンシップ・博物館実習



毎年恒例となりました、神戸芸術工科大学インターンシップと甲南大学・武蔵野美術大学の博物館実習。美術館の様々な業務に当館スタッフと共に携わります。今年度は「ヨコオ・マニアリズムvol.1」会場内での資料調査・整理作業が中心のため、展覧会にあわせた総活動期間は大学の前期試験直前の7月から後期授業や学園祭のある11月までと、長期に及びました。

展示室での資料調査は皆さん初めての慣れない作業である上、人に見られ続ける環境で、緊張の連続だったかと思います。しかし、真剣に冷静に活動している姿に大学生と気付かなかったお客様も多かったのではないのでしょうか。一方で、展覧会の作品目録を印刷したり、開架図書を準備したり、事務所でひたすらデータ入力をしたりといった人の目に触れない業務にも一生懸命取り組み、美術館の表でも裏でも大活躍でした。

奥野雅子 | 本館学芸員補助



資料調査をするための道具一式もアーカイブルームから展示室へ移動
たくさんありますね



作品の保存環境を整えるための清掃作業



展示室での資料調査作業風景



次回展覧会に関連する資料を発見！
「ヨコオ・ワールド・ツアー」でご覧いただけます

the Y+T times

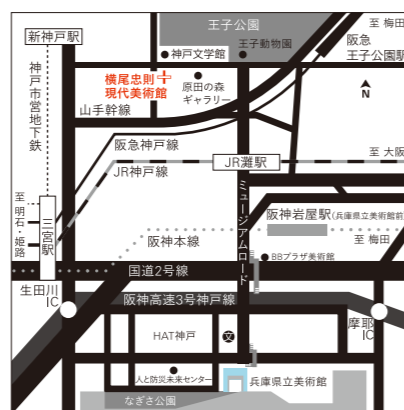
横尾忠則現代美術館ニュース

Yokoo Tadanori Museum of Contemporary Art *NEWS LETTER*



兵庫県立美術館 | 展覧会スケジュール

- 特別展 新宮 晋の宇宙船**
3月18日(土)–5月7日(日)
- ベルギー 奇想の系譜** ポスからマグリット、ヤン・ファールブまで
5月20日(土)–7月9日(日)
- 「怖い絵」展**
7月22日(土)–9月18日(月・祝)
- 県美プレミアム**
- Out of Real「リアル」からの創造/脱却**
4月1日(土)–6月25日(日)
- 小企画 | 美術の中のかたち 一手で見る造形(仮称)**
- 特集 | 新収蔵品紹介(仮称)**
7月8日(土)–11月5日(日)



Y+T MOCA

開館時間
10:00–18:00
(展覧会開催中の金・土曜日は
10:00–20:00)
※入場は閉館の30分前まで
休館日
月曜日(祝日の場合は翌日)
年末年始 メンテナンス休館

facebook
twitter

Y+Tメールマガジン登録
www.ytmoca.jp/news/index.html

〒657-0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30
Tel: 078-855-5607(総合案内) Fax: 078-806-3888
www.ytmoca.jp

※兵庫県立美術館の特別展又はコレクション展の有料チケット半券ご提示で、
当館の企画展を団体割引料金でご覧いただけます(詳細はHPなどでご確認ください)

編集後記

国内外の様々な場所でますます注目が高まっている横尾さん。
そして、当館でも展示やイベント盛りだくさんだった本号はお楽しみいただけましたか？
さて、今回の展覧会は横尾さんと世界旅行!お見逃しなく!(藤原)

横尾忠則現代美術館ニュース Vol.14・15
2017年3月30日発行
編集・発行: 横尾忠則現代美術館
印刷: 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

14 15

2017.3.30

YOKOO MANIARISM vol.1



郵便局員に憧れていた横尾さんならではの、郵便にまつわる作品と資料。風景入通信日付印が押された日記のページを壁紙にしています



横尾さんの自宅から引っ越してきた「おじぎ福助」



猫とモーツァルトと涅槃。日記に現れる関心事が作品に結晶します

「ヨコオ・マニアリズム」は、当館が横尾さんからお預かりしているアーカイブ資料を、その調査過程も含めて紹介する展覧会シリーズです。現在当館に保管されている資料は段ボール箱や衣装ケース約700箱分。そのなかには、作品のモチーフとなった写真や印刷物、制作過程でのアイデアスケッチや原稿、さらには作品から派生した商

品、横尾さんのコレクションである絵葉書、レコード、蔵書など多種多様の資料が詰まっています。展覧会やカタログを通じて広く認識されている絵画やポスター等の作品に比べ、目にする機会が少ない資料ですが、制作のプロセスや発想の源を知ることができる貴重な存在なのです。このシリーズは、学芸スタッフによる日々の地道

な整理作業のなかにある驚きや発見をお裾分けしたいという想いから生まれました。そして、その資料を手がかりに、ヨコオワールドに仕掛けられた様々な謎を鑑賞者とともに解き明かしながら、横尾さんの頭の中を探ろうとする企画です。その第一弾となる本展では、横尾さんの日常と制作との関わりをテーマとしています。その象



《現実と非現実の間》1994年 | 兵庫県立美術館蔵



《現実と非現実の間》制作資料作家蔵



横尾志則の日記 | 作家蔵

微的な存在として横尾さんのご自宅やアトリエから特別出品された資料の数々も見どころです。その一つが、展覧会の導入部分に並んだ1981年から昨年までの35年分の日記。飼い猫のスケッチや夢日記、新聞のスクラップといった日常から、旅先でのチケットや絵葉書が貼られた特別な日の記録、不意に思いついた制作のアイデアまで、素材の引き出しのようです。

3階の展示室入口にある、「おじぎ福助コレクション」も目玉のひとつ。20年間、横尾さんの自宅階段に飾られていた福助たちをそっくりお借りして、横尾家の階段を美術館に再現しました。日常の中にある非日常空間と、非日常的な美術館の中での横尾さんの日常が交錯します。その先には飼い猫のスケッチやモーツァルトに関する書籍、涅槃像のコレクションが並びます。日々の関心事が絵画や彫刻に結晶し、不思議の世界を

に沿って、横尾さん自身のマニアックな面も紹介しています。その代表的なものが「郵便」。横尾さんの日記を眺めてみると、旅先の郵便局で押された「風景入通信日付印」が頻繁に登場します。それらのページを壁紙として、郵便にまつわる作品やスケッチを並べました。横尾さん自身がデザインした切手や風景入り通信日付印、記念切手のデザイン公募で佳作となった高校生時代のデザインなど、画家にならなければ郵便局員になっていたという横尾さんの、変わらない郵便熱を拾い上げた展示になっています。

続行中の調査作業そのものを展示しているのも本展の特徴です。大きな展示室の真ん中にアーカイブルームの一部を移行させたスペースをつくり、未調査の箱を開梱して記録する一次調査を行っています。展示中の作品の関連資料が発見されたり、次の展覧会のアイデアが生まれ

作り上げる様子が、真っ赤な空間にカオス的に展開されています。

たり、静かな展示空間の中でドラマが生まれていました。

作品に仕掛けられた謎を解明しようという姿勢で取り組んだ企画でしたが、一步前進すると次の謎が現われます。担当者自ら底なしのヨコオワールドを体感する展覧会となりました。横尾さんによれば、「ヨコオ・マニアリズム」100回分くらいの資料がまだ残っているそうです。

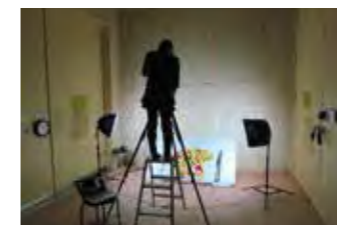
平林 恵 | 本館学芸員



展示室の真ん中の作業スペース。資料調査の過程も展示しています

Column アーカイブ資料について

企画展「ヨコオ・マニアリズム vol.1」ではアーカイブ資料を多数出品しました。作品や資料を展示するまでには目的や対象にあわせた手法で段階的に調査研究・整理作業を行いますが、今回の展覧会準備に際する調査は数の膨大さもさることながら、原稿やスケッチ、写真や印刷物、レコード、書籍、洋服や時計などのグッズ類等々……対象となる資料はまさに多種多様！学芸スタッフ皆で検討を重ねながら取り組みま



資料の撮影作業もほぼ全て学芸スタッフがを行っています



ジグソーパズル資料の組立中。資料保護のため白手袋で慎重に作業します

した。横尾さんがジョン・レノンからもらったTシャツはどのような手法で修復しようか、マッチ箱の中に入っているマッチ棒はどのように保存したら安全なのか、展示するために組み立てたジグソーパズルは展覧会終了後元通りくずすのか……

アーカイブ資料の難しさ、面白さ、奥深さをあらためて実感する調査でした。

奥野雅子 | 本館学芸員補助

よろこそ! ゆ 横尾温泉郷



3階展示室入口の女湯のれん



《草津よいとこ一度はおいで》2005年 | 個人蔵

世界有数の温泉大国である日本において、温泉は身近であると同時に特別な存在でもあります。各地にある温泉地の多くはもともと湯治場として発展したものであり、そこには病を抱えた人々が回復への切実な願いを込めてやって来ました。現代においても、普段の生活で溜まった疲れやストレスを癒そうと温泉地を訪れる人は多く、温泉は肉体的・精神的な「再生」「復活」の場として、私たちが日常から非日常へ、死から再生へと誘ってくれるものであるといえます。

2005年から08年にかけて、横尾さんは雑誌に「温泉主義」と題する旅行記を連載しました。この連載のために描かれた一連の作品〈温泉シリーズ〉は、草津、有馬、箱根といった日本各地の「温泉」をテーマにした異色の作品群です。温泉

街の街並みや旅館の浴場、訪れた観光地など、横尾さんが旅先で出会った光景と、そこから呼び起こされた個人的な記憶や連想とがまざりあい、虚構と現実が交錯するどこか夢のような不可思議な世界が生み出されています。

《草津よいとこ一度はおいで》に登場する草津温泉は、横尾さんが連載「温泉主義」の取材旅行で最初に訪れた温泉地で、その湯にはほんのすこしつかっただけで、病気の後遺症である神経痛がびたりと治ったことから、温泉嫌いの横尾さんを温泉主義者にしてしまった場所でもあります。画面には草津名物・湯畑に注ぐ滝を背景に、草津を訪れた著名人たちの顔がコラージュされますが、湯けむりの中に浮かび上がるその顔は、死者たちの魂のようにも見えます。また



《鬼怒川一日世界一周の旅》2006年 | 作家蔵

《鬼怒川一日世界一周の旅》では、鬼怒川渓谷沿いに立ち並ぶ温泉街の建物が、近郊のテーマパーク「東武ワールドスクエア」を訪れた際に見た世界各国のミニチュア建造物のイメージに置き換わり、スフィンクスやピサの斜塔、厳島神社の鳥居などが描かれます。作品のタイトルは横尾さんの愛読書・ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』に基づいたもの。横尾さんが夢中になった冒険物語の世界が鬼怒川温泉に重ねられているのです。

こうした〈温泉シリーズ〉の誕生のきっかけとなったのは、2004年に銭湯を改修した画廊で行った個展でした。横尾さんはこの画廊を「元の銭湯に戻してやろう」と、たくさんの女性たちが湯浴みする女湯の光景を描いた連作〈銭湯シリーズ〉を発表します。それを見た旧知の編集者が、「銭湯

の次は温泉にしませんか」と横尾さんに提案したことで、温泉巡りの取材旅行が始まったのです。この〈銭湯シリーズ〉は、横尾さんが幼少時代に母親に連れられて入った女湯の記憶に基づくと同時に、シリーズを通じてあちこちに登場する同じポーズの浴女たちや、上下左右に途切れた絵柄が互いにつながるトリックなど、随所に遊び心あふれる仕掛けが隠されたユニークな連作となっています。

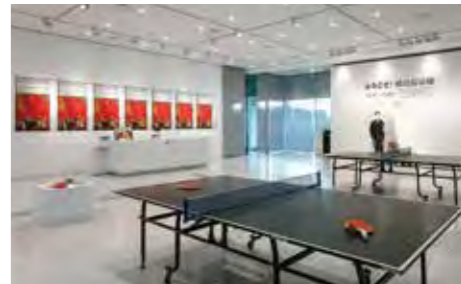
本展ではこの「温泉」と「銭湯」に基づく2つのシリーズを軸に据えて、温泉地の歓楽ムードと祝祭的なイメージを盛り込むべく、美術館全体を温泉施設に見立てて、様々な展示を試みました。2階の大展示室には、〈温泉シリーズ〉を中心に、1973年から74年にかけて雑誌『芸術生活』に連載された「日本原景旅行」シリーズや「ご当地」Y字路など、日本各地を舞台に制作された絵画、版画、観光ポスターなどを交えて展示しました。北から南まで、横尾作品を「観光」しながら巡る日本縦断の旅です。3階では、展示室を横尾温泉の大浴場に見立て、会場の中央に大きな湯ぶねを設置。それを取り囲むように、〈銭湯シリーズ〉の絵画が、ロッカーや脱衣かご、体重計や洗面器などとともに並びます。さらに、1階エントランスには卓球台を設置し、来館者が自由に温泉卓球を楽しめるスペースとしました。入口には城崎温泉の旅館からお借りした歓迎看板も設置し、記念撮影用の顔出しパネルも用意。ミュージアムショップはお土産処、併設のカフェはお食事処に変わり、それぞれにのぼりが立ちました。通常の展覧会では行わない様々な作業をこなすことになった担当者でしたが、実際の展示が進



《乙女湯(へちまと壺)》2004年 | 作家蔵(横尾忠則現代美術館寄託)

むにつれて、美術館が異空間へと変容していくさまは愉快でもありました。「旅は一種の『ハレ』でもある」という横尾さんの言葉どおり、いつもの美術館とはちょっと違う、不可思議な温泉の旅を愉しんでいただけたでしょうか。

林 優 | 本館学芸員



1階エントランスの温泉卓球場



会場には芸者さんの唄が流れます

Special Report 03

海外での横尾忠則展ラッシュについて

昨年より、横尾さんをフィーチャーした展覧会が海外で相次いでいます。まずワルシャワのポスター美術館において、所蔵品約140点による回顧展が開催されました(2016年2月26日～5月3日)。

またイヴェルドン・レ・バン(スイス)の美術館、メゾン・ダイユールでは「ポップアート 私の恋人」展が現在も開催中です(2016年9月24日～2017年4月30日)。スイスで初めての横尾さんの個展を核に、日本のマンガやアニメ、ゲームにまつわるコレクションと、手塚治虫の原画を組み合わせたユニークなテーマ展です。

さらにロシア国立東洋美術館(モスクワ)では「横尾忠則 意味の芸術」展が開催(2016年10月5日～11月6日)、ロシアで横尾作品がまとまって紹介される初めての機会となりました。当館の平林学芸員による講演会には大勢の聴衆が押し寄せ、その関心の高さがうかがえました。

こうした海外での横尾展ラッシュの背景として、手前味噌ではありますが、2012年に横尾忠則現代美術館が開館したことで、より海外の美術関係者が作品にアクセスしやすくなったことが一因ではないかと思えます。また筆者はスイスへの作品貸し出しや展示作業に立ち会いましたが、そこで実感したのは日本のビジュアル文化に対する理解の深化です。つまり海外の美術関係者が、戦後日本の視覚文化への興味を突き詰めていくと、必然的に横尾忠則という巨大な存在に行き当たってしまうのです。観客の反応をみると、そもそも日本語が読めないこともありますが、作品のジャンルやカテゴリーを意識することなく、横尾作品ならではのイメージの洪水に身を委ねている様子が伝わってきて、思わず誇らしい気持ちになりました。

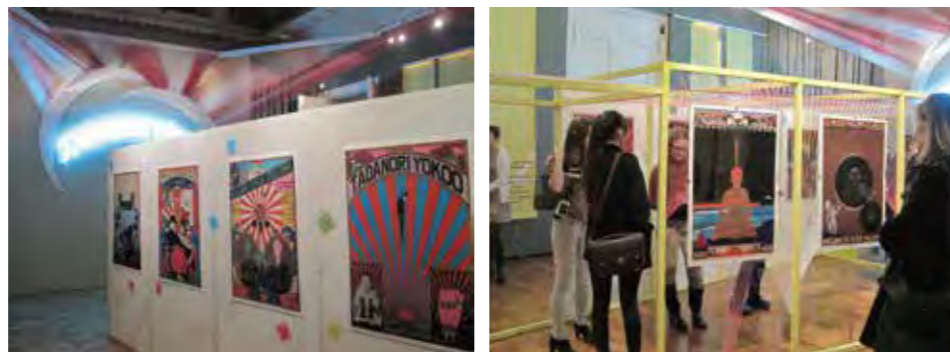
山本淳夫 | 本館学芸課長



横尾忠則デザインによる「ポップアート 私の恋人」展ポスター。背後はイヴェルドン城



「ポップアート 私の恋人」展会場風景



「横尾忠則 意味の芸術」展会場風景

著書も出版ラッシュです!

展覧会のみならず、このところ横尾さんの著書も立て続けに出版が続いています。『言葉を離れる』(青土社、2015年9月25日刊)は雑誌『ユリイカ』の連載を1冊にまとめたもので、本来のテーマは「読書」。ところが実際には、むしろ言葉(論理的な思考)から自由になり、肉体の生理に忠実に生きることを説く内容となっています。第32回講談社エッセイ賞受賞!『アトリエ会議』(河出書房新社、2015年12月26日刊)はふたりの芥川賞作家、磯崎憲一郎さんと保坂和志さんが、横尾さんとアトリエで語りあう様子を収録したものです。まさに「雑談」なのですが、時折ハッとさせられる深いことばが。

『横尾忠則 千夜一夜日記』(日本経済新聞出版社、2016年6月16日刊)は『週刊読書人』に現在も連載中の日記「日常の向こう側 ぼくの内側」から、2013年7月8日から2016年5月8日までを収録したものです。横尾忠則現代美術館も何度も登場します。『死なないつもり』(ポプラ新書、2016年10月8日刊)は編集者の質問に対する横尾さんの「語りおろし」です。平易な話し言葉でありながら、「生」と「死」の問題をはじめとする横尾さんの人生哲学がコンパクトにまとめられています。インパクトのある題名も相まってメディアでもたくさんとりあげられ、早々に重版となりました。

どの本にも「気取らないけど深い」という、横尾さんの魅力が詰まっています。ぜひご一読ください。

山本淳夫 | 本館学芸課長



DIESEL×PORTER×横尾忠則のトリプルコラボが実現!



《RK》2015年

イタリアのファッションブランド「DIESEL」(ディーゼル)の日本上陸30周年を記念して、吉田カバンのブランド「PORTER」(ポーター)と、横尾さんの作品《RK》(2015年)とのトリプルコラボレーションアイテムが日本限定で発売されました。軽くて丈夫な日本製の黒いデニム生地に、横尾作品の鮮やかな色彩が際立ちます。ちょっとしたお出かけにも使えるバッグやコンパクトな財布は、横尾ファンを始め、多くの注目を集めています。また、コラボ記念のイベントとして、渋谷のDIESEL ART GALLERYで、2016年11月24日から2017年2月10日まで、横尾さんのポップアップ・ストアもオープンし、話題を呼びました。

このコラボアイテムは当館ミュージアムショップでもお買い求めいただけます。ぜひ、ご覧ください。



「DIESEL × PORTER ARTWORK by TADANORI YOKOO」

藤原晴日 | 本館学芸員補助

EVENT REPORT 01

細野晴臣×糸井重里+横尾忠則 「夏の夜の夢トーク」レポート

2016年8月28日(日) 19:00- | 当館 オープンスタジオ(1F)

出演: 細野晴臣(音楽家)、糸井重里(コピーライター、「ほぼ日刊イトイ新聞」主宰)

スペシャルゲスト: 横尾忠則

「ヨコオ・マニアリズム vol.1」関連プログラムとして、細野晴臣さんと糸井重里さんの対談を開催しました。ウェブ上の「ほぼ日刊イトイ新聞」(以下「ほぼ日」)で、ほぼ毎日エッセイを公開する糸井さんと、「ほぼ日」で夢日記を連載したこともある、「夢」を見る達人、細野さん。「日記」と「夢」を展示のキーワードとする本展にピッタリの顔合わせです。そして、「最近、耳の調子が悪いから、ステージには上がれないよ」と言いながらも駆けつけてくれた横尾さんが、控室でのおしゃべりの勢いそのままサプライズで登場。

横尾さんがYMOの幻のメンバーだったというエピソードに始まり、「音楽が好きすぎる」細野さんと、子どもの頃は模写ばかりしていたという横尾さんの話へと展開し、好きなことに熱中し続ける子どもの心を持った大人という共通点が浮かび上がってきます。そんな遊び方を自分自身も楽しみながら、「遊び場を守るのが自分の仕事」という糸井さん。この場でも進行役は糸井さんでした。

台本も打ち合わせもないまま始まったトークは、話があちこちに飛んでいきます。そして細野さんの煙草休憩をきっかけに、話題は健康と死生観に。新聞を開くと最初に「おくやみ欄」を見るという横尾さん。他人の死を自分の死に重ねて「死のシミュレーション」をしているという横尾さんに細野さんが頷き、自分は子どもの頃から「老人の練習」をすることで死をシミュレーションしていると語ります。

トークの終盤で、糸井さんが展覧会について横尾さんに質問します。「レントゲンで診るように横尾さんが暴かれた展覧会ですが恥ずかしくないですか?」すると横尾さんから「日記とかは自分自身が走るための排気ガスのようなもの。ものを作るというのは自分の中の不透明なものやヤバイもの、いかかわしいものを音楽や絵を通して吐き出すこと」「なるべく吐き出して、軽くなりたいたい」という答えが返ってきました。

音と絵画と言葉、異なるフィールドで、それぞれ第一線で活躍する3者の、軽いけれど深い言葉に包まれた100分間は、まさに夏の夜の夢のような時間でした。

なお、この鼎談の様子は、季刊誌『考える人』(新潮社)にて2号連続(2016年冬号、2017年春号)で掲載されています。もちろん、「ほぼ日」(www.1101.com)でも配信中です。

平林 恵 | 本館学芸員



左から 細野晴臣さん、横尾さん、糸井重里さん



EVENT REPORT 02

玉置浩二ミニライブ

2016年6月21日(火) 19:00- | 当館 オープンスタジオ(1F)

出演: 玉置浩二(Vo., G.)ほか

横尾さんが全国ツアー「玉置浩二 プレミアム・シンフォニック・コンサート」のポスターデザインを手がけたことがきっかけで、当館で玉置さんのミニライブが実現しました。完全予約制だったのですが、定員200名に対して、12倍以上の約2,500名の方にご応募いただくという、超プレミアム・ライブとなりました。

約1時間のステージは、まさに完全燃焼でした。名曲「田園」は意外なことにバラード調でスタート。徐々にテンポ・アップするに従い会場は熱を帯び、自然と手拍子が湧き起ります。最終曲は「メロディー」です。マイクを介さない生声の、まさに絶唱によって、忘れがたい一夜は幕を下ろしました。

この日のためだけに、ステージのバックに上記のポスターを特別展示したのですが、お客様が帰られた後、再びステージに姿を現した玉置さんが、ポスターに向かって一礼されたのがとても印象的でした。

山本淳夫 | 本館学芸課長



圧倒的な歌唱力を間近で体感。まさにプレミアム・ライブ

EVENT REPORT 03

講演会 わたしのポップと戦争

2016年6月25日(土) 14:00-15:30 | 当館 オープンスタジオ(1F)

講師: 難波英夫(セゾン現代美術館館長)、聞き手: 山本淳夫(当館学芸課長)



斬新な切り口から横尾芸術に迫ります

「横尾忠則展 わたしのポップと戦争」の関連事業として、セゾン現代美術館の難波英夫館長をお招きし、講演会を開催しました。難波さんはかつて西武百貨店池袋本店にあったセゾン美術館の時代から横尾さんと親しく交遊し、作家からも絶大なる信頼を得ている人物で、本展の図録にも巻頭論文を寄稿していただきました。

難波さんの講演は非常にユニークで、スライドでは終戦直後の街頭で見られた傷痍軍人や米軍の放出物資(缶詰めのラベルなど)が映し出され、筆者が思いもかけなかった角度から「ポップ」と「戦争」とを関連づけられるという、極めて興味深い内容でした。

また難波さんといえば、80年代初めにデザイナーから画家に転向した横尾さんに対して賛否両論が巻き起こるなか、その画家としての活動を後押しした急先鋒でもありました。その当時のことをお尋ねすると、躊躇なく「当時から、横尾さんの絵画は間違いなく世界で戦えると確信していました」と力強く発言されたのが非常に印象的でした。

山本淳夫 | 本館学芸課長

EVENT REPORT 04

ワークショップ

「決戦! ビリヤード絵画」 「夢の日記を描こう」

2016年6月18日(土) 13:30-15:30

当館展示室、オープンスタジオ(1F)

2016年8月19日(金)、9月17日(土)

各日13:30-16:00

当館展示室、オープンスタジオ

今年度は2つのワークショップを行いました。「決戦! ビリヤード絵画」は、ビリヤードで対戦することでその軌跡が作品となるワークショップ。こちらは学校の先生と美術館との合同勉強会「先生のためのミュージアム活用術」と共同開催しました。参加者は3色のチームに分かれ、ボールとローラーにチームカラーの絵具をつけて試合開始。白球を突き、相手チームのボールを紙皿のポケットに入れていきます。試合は白熱し、そして出来上がった絵にびっくり。参加者の対戦の跡が混じり合い、カッコいい作品に仕上がりました。

「夢の日記を描こう」は、夢でみた光景を描いた横尾さんの作品にちなんで、現実ではありえないようなことが起こる夢の世界を取り入れた作品をつくりました。まず展示室に行き、横尾さんの絵の中から見つけたものを言葉でメモします。それをくじにして参加者に引いてもらい、当たった5つの言葉から物語を考えます。横尾さんの絵も参考にしながら絵を描き、そこに文章を加えると摩訶不思議な架空の夢日記が完成。展覧会会期終了まで1階オープンスタジオで展示しました。



勢いよく転がったボールは果たして…!?



激戦の跡が作品になりました



よく見て、何が描かれているかな?



横尾さんと同じ紙皿のパレットを使って制作

藤原晴日 | 本館学芸員補助

EVENT REPORT 05

横尾温泉卓球大会

2017年2月11日(土)13:30-15:30 | 当館 オープンスタジオ(1F)

「ようこそ!横尾温泉郷」展の会期中、温泉卓球場として開放した1Fオープンスタジオで、卓球大会を開催しました。美術館主催の卓球大会といういっぽう変わった試みに、下は10代から上は80代まで幅広い年代の参加者が集まり、腕を競いました。この卓球大会の特徴は、温泉卓球ならではの特別ルールとして、使用するラケットをくじ引きによって決めること。通常のラケットのほか、スリッパやなべぶた、お盆やちりとりなど、様々な日用品を使ってプレーするため、卓球経験者であっても有利とは限りません。慣れないラケットに翻弄される参加者でしたが、準決勝、決勝と試合が進むにつれてしだいにコツをつかみ、道具を器用に使いこなして、白熱のラリーへとつれ込む展開に。会場は歓声と拍手に包まれ、大盛況のうちに幕を閉じました。老若男女、誰もが一緒にプレーできる温泉卓球。どの参加者も楽しそうにラケットを振る姿が印象的でした。

林 優 | 本館学芸員



出場者は総勢33名



まずは準備体操



様々なラケットで勝負!



Editors' Choice 温泉とソフトクリーム

温泉街を歩いていると、あちこちにソフトクリームの看板が置かれているのが目につくことはありませんか? 湯上がりの火照った身体につめたく甘い感触で溶けるソフトクリームは、まさに温泉地にぴったりの食べもの。連載「温泉主義」の取材のために訪れた各地の温泉地で、真っ先に横尾さんの目に留まったのもこのソフトクリームの看板だったとか。そこで、横尾さんからのリクエストを受け、「ようこそ!横尾温泉郷」展では、このソフトクリーム看板を20個ほど調達し、展示室をはじめ館内の様々な場所に展示しました。ポップで愛らしい佇まいのソフトクリーム看板は来館者の目を引き、記念撮影スポットとして大人気。あわせて当館併設の「ばんだかふえ」でもソフトクリームの販売を開始し、「横尾温泉」の湯上がり(?)に味わっていただきました。



展示されたソフトクリーム看板



春に向けて「さくら味」も登場

林 優 | 本館学芸員

Preview 01 開館5周年記念展 ヨコオ・ワールド・ツアー

2017年4月15日(土)~8月20日(日)

見聞きしたものを独自に変換し、編集して自身の作品に取り込む横尾さんにとって、外国への旅はイメージネーションの宝庫でした。1964年のヨーロッパ旅行以来、横尾さんは世界各国を訪れています。なかでも1967年のニューヨーク、1974年以降繰り返し訪れるインドは、作品に多大な影響を与えました。さらに、1980年にはニューヨーク近代美術館でのピカソ展を機に画家に転身するなど、旅は横尾さんの生き方に深く関わっています。

また、横尾さんの作品が世界に知られるようになると、海外での展覧会や仕事も増え、様々な分野の第一線で活躍する人々との交流が、表現の幅をさらに広げていきます。

本展では、ヨコオワールドがまさに世界に広がっていく様子を、関連作品と資料から辿ります。

平林 恵 | 本館学芸員



横尾忠則《ME MELANCHOLIA》2010年
作家蔵(横尾忠則現代美術館寄託)



ニューヨーク近代美術館「ワード・アンド・イメージ」展
(1968年)のためにデザインしたバナーとともに

Preview 02 開館5周年記念展 横尾忠則 HANGA JUNGLE

2017年9月9日(土)~12月24日(日)

横尾さんは、1968年より現在までに230点を超えるHANGAを制作しています。今回、それらのほぼ全てを展示する大規模な展覧会を開催し、HANGAを通じて横尾さんの表現の全貌に迫ります。本展覧会はタイトルにある「HANGA」と「JUNGLE」をキーワードに、横尾さんの表現の軌跡とその内容を紹介するものです。すでに英単語として世界に通用する「HANGA」には、古典的イメージが付随する「版画」とは違う、「超版画」とあるという意味を含ませました。また「JUNGLE」という言葉には、直感と衝動によって森羅万象が描かれた横尾HANGAの表現の多様性と、生物の共生によって多様で複雑な生態系が形成され、原始が残るJUNGLEのイメージを重ね合わせています。

本展はこれら2つのキーワードに沿って、横尾忠則のスーパーHANGA群をJANGLE風に壁面を埋め尽くすように展示し、HANGAの群生による驚異の表現世界を出現させることを目指しています。そのような空間とHANGAからは、思考や論理を重視したモダニズムに抗う横尾さんの創作姿勢の今日的な意義や現代版画の未来を予見することさえできるでしょう。

山本淳夫 | 本館学芸課長



《ターザンがやってくる(緑)》1974年 | 作家蔵(横尾忠則現代美術館寄託)